反射される現在
—ロベルト・アルルトの長編小説『七人の狂人』と『火炎放射器』における註釈の一つの機能

高際　裕哉

El presente reflejado: una estrategia de Nota al pie en “Los siete locos” y “Los lanzallamas” de Roberto Arlt

Yuya TAKAGIWA

Resumen

En este ensayo analiza la manera de la utilización de “la nota al pie de la página” que aparece en las novelas, *Los siete locos* (1929) y su seguida *Los lanzallamas* (1931) escritas por Roberto Arlt (1900-1942).

En ambas novelas, Arlt agrega unas 30 notas al pie de la página. Y en 4 partes de esas notas al pie relata las noticias de ese período.

La explicación agregada en la versión de Galaxia Gutemberg que fue publicado en el año 2000, clasifica las funciones de “notas” agregadas por Arlt en ambas obras: “1. *por la interpretación, corrección, o suposición*; 2. *por consulta a otras voces*; 3. *por la reproducción de las palabras Erdosain que permiten reflexionar sobre lo hecho o dicho.*” (Zubieta, 2000: 80)

Hasta cierto punto, esta clasificación acierta la característica de la “nota” de las obras. Y en otra parte de esta versión indica la estrategia frecuentada de insertar las noticias en las obras de Arlt.(Zubieta, 2000: 354) Es decir, separa la la función de la “nota” e insertación de las noticias en las obras.

En este ensayo, demuestra que en las obras desempeñan ciertas funciones las 4 “notas” en las que relatan las noticias del momento. Esas notas están ligadas con el trama de la sociedad secreta de las novelas y funsionan como los puntos de consulta al mundo exterior de la ficción. Insertando las noticias a las notas al pie de la página, Arlt escribió las dos obras de ficción abiertas al mundo afuera del texto.

目次

0. はじめに
1. 先行研究と本稿の意義
2. 前史：『ブエノスアイレスにおけるオカルト科学』とオカルト帝国主義
3. 『七人の狂人』・『火炎放射器』における秘密結社の物語
4. 作品内における頁末脚注の役割
4.1. 頁末脚注における国際ニュースの役割
4.1.1. イエロー・ジャーナリズムと世界メディア
4.2.2. 地球の裏側の帝国主義
4.2. 頁末脚注における国内ニュースの役割
4.2.1. クーデターの予見
4.2.2. アナキスト、ディ・ジョヴァンニの復活
5. 終わりに―社会の歪んだ鏡としての小説・対照される現実

0. はじめに

本稿ではアルゼンチンの作家ロベルト・アルルト（Roberto Arlt: 1900-1942）の代表的な二つの連作小説、『七人の狂人』*Los siete locos*（1929）、および『火炎放射器』*Los lanzallamas*（1931）、において作品内につけられた頁末脚注の機能について分析する。

『七人の狂人』および『火炎放射器』はいわゆるラテンアメリカ文学のブームとは異なる時代に書かれた特異な位置づけの作品である。この作品の中で、アルゼンチン一国やラテンアメリカといった地域と言った枠組みを越え、当時の世界がはらんでいた不安に形を与えるために、作品内の頁末脚注が役にたっていることを述べていきたい。

筆者はすでにアルルトの経歴についてまとめているが（高際，2014: 70-73）、議論の展開のために一部の重複を恐れずアルルトのバイオグラフィーを俯瞰しておこう。アルルトは1900年にブエノスアイレスに生まれた。父親は、プロイセンのポズナニ、母親はトリエステ出身の移民の家族であった。公教育からは早々にドロップアウトするものの、様々な職を転々とする傍ら読書に耽り、作家になることを夢みた。20代の前半、アルゼンチンのコルドバで兵役に就きながらも創作を続ける。兵役を終えブエノスアイレスに帰還したアルルトは、当時アルゼンチン文壇の重鎮であったリカルド・グイラルデス Ricardo Güiraldes（1866-1927）に師事し、1926年、処女作『怒りの玩具』*El juguete rabioso* を出版する。

小説の出版以降、アルルトは文筆業で日々の糧を得ることになる。アルルトの出自によく現れている通り、19世紀末にヨーロッパから多数の移民がブエノスアイレスに移住し、やがて社会階層としての大衆を形成した。これらの新たな大衆に向けて、知識階層や中産階級を読者としてきた旧来の新聞とは異なる新たな内容（娯楽的な記事やイエロージャーナリスティックな内容を持った記事など）と形式（カラー刷りであったり、写真を多用したもの）を持った新聞・雑誌が多数創刊されたのが1920年代である（SARLO, 1988: 13-29）。アルルトはその大衆メディアの拡大の波にうまく乗ることができたクロニスタであった。1927年にはタブロイド紙 *Crítica* の犯罪担当の記者となり、1928年には日刊紙 *El Mundo* のクロニスタ（コラムニスト）として、ジャーナリズムのスター・システムに乗った。彼はクロニカを1928年以降ほぼ途切れることなく、彼が没する直前まで書き続けた。

大衆向けのクロニスタとして執筆活動する傍ら、アルルトはフィクションを書き続ける。生涯にわたり書き続けた短編小説はおよそ73編におよぶ[1]。長編小説は1926年から1932年の間にわずか4作品を出版したのみである。『怒りの玩具』*El juguete rabioso*（1926）、『七人の狂人』*Los siete locos*（1929）、およびその連作小説『火炎放射器』*Los lanzallamas*（1931）、『魅惑的な恋』*El amor brujo*（1932）である。その後、比較的長い作品発表の場所は戯曲に移り、およそ10作品の戯曲を残す。

アルルトがアルゼンチンの文壇の中で占める位置はかなり特異である。ボルヘスを筆頭とするヨーロッパ前衛と肩を並べる文壇のグループとは距離を置き、ま

た労働者階級を代弁しようとするプロレタリア文壇に半ば参加しつつもある程度の距離を保っていた[2]。移民出自を背景にもつアルルトは、旧来の知識人階層や中産階級を対象とした小説とは全く異なる独特のスタイルをとる。アルゼンチンの街場を舞台の中心に据えながらもフィクション性の高い物語を紡いだ。その意味でアルゼンチンの伝統的な上流階級を代表する作家ボルヘスと対照的な作家として語られることが多い。

アルルトの創作作品の中でも最も高い評価の対象となっているのが連作『七人の狂人』・『火炎放射器』である。この連作は二つの物語が交差して語られる作品である。一つはブエノスアイレスの典型的なホワイトカラーの主人公、エルドサインの苦悩を語る物語、もう一つはインフォーマル・セクターの胴元となり、政府転覆を企てる秘密結社の奇妙な物語である。

作品の評価の傾向のいくつかの例を挙げてみよう。一つは都市描写と心理描写のあり方である。1950 年代からは実存主義の流行を受けてエルドサインの内面的苦悩に焦点が当てられて論じられることが多かったが、近年の評価では、ドイツ表現主義の流れをくむ映画からの影響が盛んに論じられている。内面的表現を外部へと投射する、という表現主義の手法が踏襲されているという指摘である。1920 年代から 30 年代にかけて世界都市として成長していたブエノスアイレスの情景に登場人物の心理的内面が投射されることによって風景がデフォルメされ、独特の表現が獲得されていると評価されている[3]。

また、この作品は、出版された当時の世界が抱いていた戦間期の恐怖、とりわけファシズムへの傾倒とその恐怖を描いた作品として読み取ることができる[4]。それは秘密結社の物語に描かれている。

当時のできる限りの情報を集めて、それの時代の不穏な空気をフィクションの形に昇華している。その世界の不穏な空気を、フィクションを通じて形にするための手法の一つとして使われたのが『七人の狂人』および『火炎放射器』における頁末脚注の手法であることを本稿では証明したい。

1. 先行研究と本稿の意義

日本においても、アルルトの小説内における註釈に言及した論文が存在する。鬼塚哲郎､「注のついたフィクション―ボルヘスのテキストにおける頁末脚注のナラトロジー的分析」､『ラテンアメリカ研究年報』（No. 19, 1999）、151-170 である。鬼塚は論文の注に「じっさい､ボルヘスが文学的資源として発展させた脚注を、ボルヘスとは異なった方向ではあるにしても、もっとも大胆に活用したのがこの『蜘蛛女のキス』である。『蜘蛛女のキス』における脚注の機能を分析したすぐれた研究として Amícola がある。なお、Amícola 氏からは、アルゼンチン文学の文脈でフィクションに頁末脚注を付けた例はアルルト [Arlt 1929, 1931] に先例があることを学会（注 1 参照）[5]の発表の際に指摘していただいた。したがってボルヘスにおける脚注を文学史上で捉える場合、18 世紀フランスの書簡小説、Benstock の指摘する英文学における流れ、アルルト、ビオイ＝カサレスらアルゼンチン文学の先達の三つの流れを考える必要があるだろう。」（鬼塚，1999: 167）と述べている。Amícola の指摘にはそれ以上踏み込まれていない。

ロベルト・アルルトの二つの小説には、物語の架空の作者であるという位置づけのクロニスタ（新聞記者）による頁末註釈が書き込まれている。『七人の狂人』には 13 箇所､『火炎放射器』では 17 箇所見受けられる。

小説の中で初めに註釈が挿入されるのは以下の場面である。主人公のエルドサインが妻エルサのいとこの資産家バルスートを殺し、秘密結社創設のための金を得ようとする目論見に失敗する。エルドサインは自らいとこを殺そうともくろみながらもしどろもどろになり、人を殺すことについてわけのわからない説明をする箇所である。

> きっと精神の数学っていうのが存在するに違いない。その恐ろしい掟というのは結合や数字や線を統べる掟ほど強固なものだ。

（1）註釈者による註：エルドサインによるこの告白の一節は、犯そうとしている犯罪の理念が彼の中に無意識的には存在しなかったのではないかと、私は考えるようになった。このことはバルスートを襲うに際して前向きな態度を示していなかったことを説明する。（Arlt, 2000: 80）[6]

物語の語り手の及ぼす効果について分析したナラトロジーの代表的研究書であるジュラール・ジュネットの『物語のディスクール』では、「語り手が自分の語る物語内容の中に登場しない場合」を「異質物語世界の物語言説」と呼んでいる。また語り手が自分の語り物語内容の中に、作中人物として登場する」場合を「等質的物語世界の物語言説」と呼んでいる。（ジュネット, 1985: 287-288）『七人の狂人』および『火炎放射器』には、小説の本文の下に、“Nota del comentador”「註釈者による註釈」、“Nota del autor”「作者による註釈」、“Nota del cronista”「クロニスタによる註釈」あるいは“Nota”「註釈」とだけ記された、物語内の架空の作者による小説への註釈が付されている。

アルルトの場合は、ジュネットの分類を適用する際、ページの下部に付された註釈をどのように扱えばいいのだろうか。スペイン在住の研究者リタ・グヌッツマン（Rita Gnutzmann）がその分析を行っている。彼女の指摘によれば、アルルトの両作品とも、分類上は「後置的に」（“relata posteriormente”）「異質物語世界の語り手」（“El narrador extradiegético”）が語る物語である。頁末脚注の内容の多様性と、いくつかの例外は認められるにしても、小説内に付け加えられた“Nota”の語りも形式上は同じ「異質物語世界の語り手」が語っていることになると分類している。厳密に言えば、「異質物語世界の語り手」は作中の登場人物と接点を持ち、かつ一人称の形で登場人物へのコメントを差し挟んだりするのだが、その役割は副次的であると述べている（GNUTZMANN, 1984: 127-128）。

しかし、グヌッツマン自身も同箇所で指摘していることだが、アルルトはしばしば頁末脚注の中で歴史上の史実、あるいは執筆最中に起こったニュース作品に挿入している。その箇所はグヌッツマン自身がジュネットをはじめとした語りの形式的な分析概念を使っている以上、頁末脚注の内容、およびに頁末脚注が小説内で果たしている効果には踏み込めない。本稿が着目したいのは頁末脚注の形で小説に挿入されるニュースの役割だ。

ナラトロジー的な分析以上に、アルルトの頁末脚注の戦略には説明の施しようがあるのではないだろうか。形式的な分類よりも、記述されている内容に興味は向けられないだろうか。『七人の狂人』および『火炎放射器』における註釈の手法は小説全体の内容にどのような効果を及ぼしているのだろうか。

現在のところ最も信頼できる『七人の狂人』・『火炎放射器』の校註版は Roberto Arlt, *Los siete locos ; Los lanzallamas* : edición crítica; Mario Goloboff, coordinador, ALLCA XX, Université Paris X, Galaxia Gutenberg : Círculo de Lectores である。同版においてテクスト・クリティーク、および作品に対する註釈を行っているアナ・マリア・スビエタ（Ana María Zubieta）は、上に引用した小説内におけるアルルトの手による最初の註釈部分に以下のような解説を付している。

c. この箇所は註釈者もしくは物語の記述者、つまり物語の最も重要な人物による最初の註釈である。重要な人物というのは、彼が三つの異なる方法で真実への到達の道筋を指し示すためだ。1. 解釈、修正、仮定。2. その他の発言の参照。3. 起こったことや言ったことを再考するエルドサインの言葉の再現。この註釈は第一の範疇に分類される。（ZUBIETA, 2000: 80）[7]

「2. その他の発言の参照」の原文は“*consulta* a otras voces”である。「発言」と訳した“voz”の第一義は「声」である。スペイン語の辞書 *María Moliner* の“voz”の定義 12 項目に“Palabra, considerada más en su forma que en su contenido conceptual”つまり「概念的な内容より形式として考えられる言葉」との記述があるが、やはりこの定義も、伝達内容を旨とするニュースの引

用は、スビエタの分類「2. その他の発言の参照」と訳した 2. の分類にも入ることになるとは考えられない。2. の定義は、やはり主人公以外の登場人物の発言の参照なのだ。

小説内に語り手による註釈が入ることで、物語に重層性が加えられる。この小説は異質物語世界言説の語り手である「註釈者もしくは物語の記述者」が主人公やオカルト集団の事の顛末を三人称の視点から描くという体裁を取っている。その地の文にページの枠外から「註釈者もしくは物語の記述者」によって物語では描ききれなかった余談、もしくは物語の展開上必要な筋が註釈の体裁をもって書き加えられる。そのことによって、この小説全体の枠組みが、当時流行し始めていた新聞記者あるいはクロニスタ（コラムニスト）による探偵小説の体裁を取る。おそらくアルルトが『七人の狂人』を書き始めた際に念頭に置いていたのはその効果である。その点まではスビエタの説明で納得がいく。しかし、それでは脚注の効果をテクスト内部に閉じ込めてしまうことになる。

スビエタは上の引用部分とは異なった作品の後半部の作品に現れた註釈に対してこう述べている。

> a. 登場人物の誰かによって読まれるニュースの存在は、ロベルト・アルルトの作品の中ではお決まりのパターンである（1926 年に出版された処女作である『怒りの玩具』でもその場面はすでに示されている）。（ZUBIETA, 2000: 354）[8]

つまり、スビエタはアルルトの頁末脚注の手法から「ニュースの挿入」を外し、アルルト作品における紋切型と分類していることになる。このことに筆者は異議を唱えたい。「ニュースの挿入」がアルルト作品における「お決まりのパターン」であったとしても、それを頁末脚注に挿入することで作品にどのような効果をもたらすために付け加えられていたのか。ジャーナリストで日々の糧を賄い、作家としての活動を続けたアルルトは現実とフィクションの境目を行き来しつつ日々筆を走らせていた。それゆえ、『七人の狂人』・『火炎放射器』で用いられた頁末脚注の戦略は、テクストに語りの重層性をくわえるのみならず、テクストを外部に開き、テクストが外部世界と繋がれた作品とするために用いられた手法ではなかったのか。

一作目、『七人の狂人』が出版されたのは 1929 年、世界恐慌と同じ年である。金融システムがすでに世界化していたこと、第一次世界大戦で総力戦を経験し、また戦場では新型の大量殺戮兵器が導入されたこと、軍事技術の発展と併せるかのように新たな科学技術が発明され、新たな経済のグローバル化が始まったこと、世界中にオカルト集団が跋扈していること、新たな世界大戦の火種がくすぶっていることなどの世界的な動向が小説の中に織り込まれている。そのグローバルな不安とそこからの解放へのカタルシスを描きこんだテクストである。それをフィクションの形で提示するにあたり、怪異なフィクションを歪んだ現実の鏡として際立たせるために「ニュースの挿入」の手法が頁末脚注にも用いられたのではなかったのか。これが本稿が論証し主張したい点である。

そのことを念頭におき、まずはアルルトが若かった頃、すでに註釈の手法を取り入れていたということを提示し、続いて『七人の狂人』と『火炎放射器』にスビエタの分類から外れる四つの註釈がどのように取り入れられ、どのような効果を生んでいるのか、作品内でどのような効果をもつのか検討したい。

2. 前史：『ブエノスアイレスにおけるオカルト科学』とオカルト帝国主義

本章では『七人の狂人』・『火炎放射器』の前史として、アルルトが 20 歳の時に書いたテクストを紹介したい。このテクストにはオカルト組織の存在が述べられ、論文形式の頁末脚注の手法が用いられている。

そのテクストは *Las ciencias ocultas en la ciudad de Buenos Aires*『ブエノスアイレスにおけるオカルト科学』と題された、半分フィクションともとれるエッセイである。このエッセイは Roberto Godofredo Arlt というペンネームで日刊紙 *Tribuna Libre*, 1920 年 1 月 28

日付に掲載された（SAITTA, 2000: 227）。

エッセイの内容は以下のようなものである。アルルトはまずボードレールの『悪の華』に憧れ、神秘体験を経験しようと街へ出る。しかし、街で体験したオカルト教団、Vi-Dharma（筆者註：団体として特定できず）や Sciencia Divina（1888 年に合衆国サン・フランシスコで結成された Church of Divine Science のブエノスアイレス支部）のあり方があまりにも排他的で原理主義的であり、教義も様々で雑多なそのような団体が世界的に流行し、結果的にブエノスアイレスにおいても活動していることを描写し、論を展開していく。

論文の形式でアルルトが中心的に批判しているのは、Sociedad Teosófica（Theosophical Society: 神智学協会）の活動である。ヘレナ・ペドロヴナ・ブラヴァツキー（Helena Petrovana Blavatsky: 1831-1891）の著作 *Doctrina Secreta*（原著 *The Secret Doctorine* [1888]）が書かれるまでの経緯とその内容を紹介し、同教団は西洋と東洋のあらゆる宗教的要素を混交させたものであり、内容に一貫性がないことを指摘している。また、アルルトはこれらのオカルト宗教が近代がもたらした災厄に対する反動の結果であるにせよ、今後の世界の発展には寄与しないことを述べている。

> 結論付けよう。私は 8 歳から 15 歳くらいまでの女の子たちが、彼らの両親は無分別にも彼女らを教団へと導こうとしているのだが、すでに引用した類の本を手にしているのを見た。そういった本を読むことが、暗示にかかりやすい子供の柔軟な精神に及ぼす影響は言うまでもない。（...）
>
> このようなことは痛ましいことで、現実はもっと酷くなるだろう。もしもこういった団体に共同体がブレーキをかけるか法律で規制をするかしなければ。なぜならこういった団体はある未来と緩やかな退廃を孕んでいるからだ。（37）
>
> （37：頁末脚注）警察の行動は賞賛に値するものだった。先ごろカジャオ通りとコリエンテス通りの角に位置する魔法学校を閉鎖したのだ。
>
> （Arlt, 1991: 550）[9]

アルルトは論文の後半部に、神智学協会が、東洋と西洋の文化の混交を目的としているのにもかかわらず、英国の帝国主義的拡大に一役買っているのではないかと、在インドアルゼンチン領事 F. バサルドゥアが書いた文章を引用し、論を展開している。以下はバサルドゥアの著作からの引用である。

> 「ベナレスで著名な神智学者のアニー・ベサンと知り合う機会があった。彼女は若い英国人愛国者で、なにより、ヒンズー教徒の若者たちに英国政府への賛同と忠誠心を植え付けようとしていた。それが彼女の役割だった。」[10]
>
> （38：頁末脚注）「赤い民族」4 頁参照（Arlt, 1991: 550）[11]

そしてアルルトは、アニー・ベサンの著作 *¿El hombre de dónde viene y adónde va?*（*Man: Whence, How and Whither* [1913] が原著であると思われる）の一部分を引用し、彼女の抱く野心を指摘する。

> ベサンの同著作のより先の部分では、現在の私たちが不完全にしか把握できていない、近い未来に起こる社会的出来事について断言し始める。ベサンは社会学者のノビコフとバクーニンの仮説の間で迷いながらも、強い確信を持って大英帝国の覇権のもと未来の国家連合を構想している。（Arlt, 1991: 551）[12]

以上の指摘からは、オカルト宗教組織が、大英帝国の帝国主義と結びつき、世界を統治しようとしているという構想の筋が書き込まれている。西洋の歴史の中で宗教的秘密結社が政治を動かしてきたことも事実であるし、19 世紀頃から西洋諸国で社会思想が盛んに論じられる一方、オカルト神秘主義が流行し、それが実際の現実政治にかかわってきたことも多様な研究から明らかになっている。ヒトラーの唱えた「アーリア民族」もねつ造された神話であったし、我が国における「万世一系」の天皇家の神話もこの流れの中にある。

実際ナチスの「アーリア民族優生説」は神智学協会から派生した学説の影響を受けて成立したという（大田, 2013: 79-104）。イデオロギーと神話と近代国家が結託し、現実世界に影響を及ぼす時代が来ていたことをわずか20歳の時既にアルルトは見抜いていた。

アルルトのエッセイの中で、古今東西の様々な人名や19世紀末から20世紀に書かれた書物からの引用が出てくることは、小学校までの公教育しか受けていないアルルトの自己形成の努力をうかがわせる。『ブエノスアイレスにおけるオカルト科学』で扱われたオカルト主義は秘密結社によるクーデターの陰謀を扱った『七人の狂人』・『火炎放射器』のモチーフとなり、論文の形で引用文献を挙げ、註釈をくわえるという手法は、両作品でも変形されて転用された。

3. 『七人の狂人』・『火炎放射器』における秘密結社の物語

1929年の世界恐慌の波を受け、アルゼンチン経済も大停滞を余儀なくされ、社会・政治のレベルでも街場にも不穏な空気が漂うブエノスアイレスをモチーフとして書かれた『七人の狂人』・『火炎放射器』は二つの物語が交差して語られる。一つはホワイトカラーで発明家に憧れる主人公エルドサインの内面を描いた物語であり、もう一つは、首都制圧のテロリズムを目論む秘密結社の物語である。このテロリズムへの欲望は『ブエノスアイレスにおけるオカルト科学』とテーマ的には通底している。本稿が目的とする註釈は、全て秘密結社が語られる部分で挿入されるため、以下では秘密結社の物語を要約したい。

エルドサインと占星術師は秘密結社の目論見について以下のように語り合う。

> 「それじゃあ結社の一つの基礎となるものは服従ってことですか？」
> 「それと産業主義だ。人間の意識を絡め取るには金が必要だ。宗教や騎士道に神秘主義があったように、産業の神秘主義を作り上げなければならない。私の政治家は、組織の私の政治的な服従者は、産業を通じて幸福を得ようと熱望する人間になるだろう。その革命家はプリント地の織物から鉄の消磁方法に至るまでよく知識を得た人間になるはずだ。」（Arlt, 2000: 43）[13]

占星術師を名乗る男は、小説が書かれたほぼ同時代に、米国で、J.P. モーガン（John Piant Morgan: 1837-1913）、ヘンリー・フォード（Henry Ford: 1863-1947）、トーマス・エジソン（Thomas Edison: 1847-1931）が巨万の富の得たことに衝撃を受け、自らも「産業主義」つまりは拝金主義に基づく秘密結社を組織しようとする。そして、ブエノスアイレスの郊外で、秘密結社に賛同しそうな者を集め、以下のような計画を立てる。

> 「全部で四人だ。私が全ての責任を負う。」占星術師は言った。「エルドサイン、お前は産業大臣だ。金鉱脈探しの男、」テーブルの角に座っていた若者が頭を傾けた。「お前はコロニーおよび鉱山の責任者だ。少佐は軍部で我々の組織を拡大しろ。ハッフナーは娼館大臣だ。」（Arlt, 2000: 159）[14]

つまり、金鉱脈を探し当てることと、売春宿の経営で組織の運営資金を獲得し、軍部では「少佐」を名乗る男に秘密結社の構成員を組織するように命じ、主人公のエルドサインには、「銅メッキ」の薔薇を発明させ、街場のインフォーマル・セクターの主たる薔薇売りたちの胴元になることで資金を獲得させる。エルドサインはその後、首都を制圧するための毒ガスのプラント設計及び毒ガス製造を任せられる。

首都を制圧した後の計画は特にこれと言って示されず、秘密結社を中心としたオカルト集団の崇拝者を獲得し、権力を掌握することのみが示される。

ここには当然、資本主義体制に対する批判が含まれている。秘密結社の組織員の一人、売春婦を囲う「憂い顔の女衒」（Rufián Melancólico）ことハッフナーは、エルドサインに次のように語る。

「お前さんの言ってることは空っぽだ。今日日の世間ってのは男、女、子供の搾取で回ってるんだ。資本主義的搾取ってものがどんなものであるか意識を持ちたければ、アベジャネーダの溶鉄工場やら、冷凍船、ガラス工場、マッチやタバコの工場に行ってみりゃいい。」こう言っている間、男は不快そうな笑みを浮かべていた。「俺たちみたいなごろつき連中には一人か二人の女がいる。実業家たちは、人間の群れをごっそり従えている。そういう連中をなんて呼べばいい？誰が一番の悪人だってんだ？売春宿の主人か、それとも大企業の株主連中か？ところで、あんたに会社の連中はあんたを 100 ペソの給料で満足させるようにてなづけといて、連中は 1 万ペソを財布に突っ込んでるってわけだ。」（Arlt, 200: 50）[15]

つまり秘密結社の物語は、行き詰った資本主義の底辺を支える人物たちが、秘密結社を組織して裏社会、あるいはインフォーマル経済で一山あてた後、街に毒ガスをばらまき、表の政治舞台で体制転覆を試みるという筋書きだ。秘密結社の物語はアルゼンチンの政治の陰謀の寓話とも読み取られることが多いが、同時に、近代世界システム的経済構造から周縁におかれた国家に住まい、またその経済システムの反周縁の港町の片隅に置かれた人間のカタルシスを求める物語でもある。その寓話性はアルゼンチンに限らず現在の世界でも有効性を持つだろう。次の章ではフィクションとして創造された秘密結社の物語と同時に、当時の世界で起こっていたニュースを挿入する手法を列挙し、その及ぼす効果について分析を加える。

4. 作品内における頁末脚注の役割

本章では、本稿の目的であるスビエタによる『七人の狂人』・『火炎放射器』に加えられた註釈への解説の批判的検討の対象となる部分を引用の上、コメントを付け加えていきたい。いずれも小説の地の文に註釈番号がふられ、頁末脚注の形で註釈が付けられている。作品に出てくる順序とは前後するが、国外でのニュースへの言及、国内のニュースへの言及に分けて分析する。

4.1. 頁末脚注における国際ニュースの役割

フィクションの作品分析で指摘されることは少ないが、アルルトはクロニスタとして日々世界の通信社の情報ネットワークに触れ、時には南米諸国、スペインへの特派記者としての仕事もしていた。国際的な時事ニュースをクロニカに取り入れていたことも少なくない。アルルトはきな臭い 1920 年代から 30 年代の全球的な世界構造を、通信社の電信を通じて同時代的に把握していた。また全球的な情報ネットワークが現実に何をもたらすのかも理解していた。その情報の把握と情報が及ぼす影響の二重性をアルルトが知悉していたことを、以下の二つの引用から明らかにしたい。イエロー・ジャーナリズムと資本と国家が結託した帝国主義の動向という一見対照的なニュースの挿入である。

4.1.1. イエロー・ジャーナリズムと世界メディア

毒ガスをばらまき首都に革命を起そうとエルドサインのいとこバルスートと占星術師が話している間、占星術師は以下のようなことを口にする。

ユナイテッド・プレスから面白い電信が届いた。アル・カポーネの組とジョージ・モーラン、通称エル・チンチェの組が悪いことで儲けようってことで手を結んだらしい（1）。ってことはシカゴじゃ、売春で儲けてる両方の悪党が機関銃で打ち合うってことも一時は収まることになるんだろうな。

言うまでもなく、1930 年代の米国でのギャング抗争はイエロー・ジャーナリズムの世界中の話題であった。物語の架空の作者は以下のような註釈を口にする。

（1）作者による註釈：アル・カポーネとジョージ・モーランの同盟は、歴史的に厳密に言うと、短期間のものだった。語られたこの一件の後、アル・カポーネは仲間内の何名をも「ポリスメン」に変装させた。彼らは、1929 年 11 月 16 日の朝、モーランの仲間 5 名をクラーク通り 2100 番で拘束した。フランクとピートのグーセンバーグ兄弟、ジョン・メイ、アルバート・ワインスハンクとシュワインマー博士で、同じく強盗だった。彼らはカテージ・カンパニーのガレージの奥で、壁に並べられ、機関銃で銃殺された。（Arlt, 2000: 354）[16]

この事件は正確には 1929 年 2 月 14 日に起こった。「聖ヴァレンタイン・デイの大虐殺」（St. Valentine's Day Massacre）として知られている（ケリー，2010: 452-454）。アルルトによる意図的な誤記なのか、本当に勘違いをしていたのか判然としない部分である。ともかく、この一件はアルルトがイエロー・ジャーナリズムにも通じていたことを示す一節である。この註釈の後、占星術師は以下のように語る。

電信会社が真ん丸な地球上すべてにニュースを届けている。我々はもはや 20 世紀にいるんだ、お前さん、今頃世界中の誠実なまぬけどもが名高い盗賊連中の同盟を知ったってわけだ。

（Arlt, 2000: 354）[17]

身の回りに関係ない、センセーショナルなニュースを、19 世紀の半ばから世界ネットワークを形成した通信社が世界中に流通させている時代、情報が世界的に同期している時代だと言いうことに言及している。また、占星術師たちが身を置く裏社会の持つ暴力性という点では、ギャングのニュースは通底している。しかし、ギャング抗争のそれとは真逆の、世界中を覆う帝国主義的な抑圧が世界で起こっていることが次の註釈部分で提示される。

4.2.2. 地球の裏側の帝国主義

汚辱にまみれた都市と卑しい自分の身分を捨て、逃げ出したい衝動に駆られながらも出口が見えない状況をエルドサインは貧民窟で知り合ったルシアナに以下のように述べる。

出ていくって？　よくもそんな簡単に言えたもんだな！　どこへ行けっていうんだ？小さい頃、不思議な土地のことを思い浮かべていたよ。そこに土の色をした人間たちが住んでいて、鰐の歯でできた首飾りをつけているのさ。そんな場所はすでに存在しない。世界中のありとあらゆる海岸は、残酷な人間たちに占領されているんだ。連中は大砲やら機関銃を持って、コンビナートを建設したり、連中の詐欺行為に抵抗する惨めな先住民たちを生きたまま焼き殺したりするんだ。出ていくって？　出ていくために何をしなくちゃいけないか、お前知ってるか？自殺するんだよ。

（Arlt, 2000: 492）[18]

巨大資本と結託した帝国主義的な列強の進出へと言及したこのフラグメントの下に、当時の中華民国、上海の英国租界で起きた、共産党系の左翼作家たちへの弾圧のニュースが加えられる。

1. 註釈者による註
似たような奇怪な出来事を断言した際、エルドサインの言葉は的を射ていた。この本の出版を終えようとしているとき、フランスの日刊紙が中国のこんなニュースを掲載していた。Shi Wei Sen（筆者註：李偉森），共産主義作家で『上海報』の編集長だった彼は、1931 年 1 月 17 日英国人によって逮捕され、南京政府に引き渡された。南京政府は彼を五人の同志と共に火あぶりの刑に処した。彼はドストエフスキーの伝記を書いた作家だった。Fen-Keng（筆者註：馮鏗）は外国人租界内で英国人により逮捕され、屈辱的にも国民党に引き

渡され、2 月 1 日に射殺された。『復活』と題された小説の作者だった。彼は 1930 年 3 月 30 日の英国軍の手による学生虐殺を目の当たりにしてから共産主義作家へと転向した。You Shik（筆者註：柔石）。作家。英国人により逮捕され、国民党に引き渡される。2 月 17 日夜処刑される。

（Arlt, 2000: 492）[19]

この事件の顛末は、日本語文献でも知ることができる。1931 年の春、中国の「左翼作家聯盟」が世界のプロレタリア文化団体に発表したコミュニケの翻訳版が存在する。この事件は、中国国民党と上海の「英帝国主義警察」の結託による左翼作家たちに対する弾圧であった。翻訳を抜粋の上掲載する。

一月十七日、上海の英帝国主義警察は、二十四人の若き革命家を捕えた。そのうちには、一人の妊娠せる夫人があり、五人の左聯（筆者註：左翼作家聯盟）の成員が含まれていた。英国官憲は、中国区域の国民党軍憲、淞滬警備司令部へ引き渡した。ここで彼らは、同志を裏切るようにと半殺しの目にあった。これを拒絶するや、二月七日の真夜中に連れ出されて虐殺された。

（辛島、1983: 363）

以上の引用箇所とアルルトの記述を比較すると、細かい事実誤認、とりわけ処刑の方法は射殺であったり、処刑の日付が 1931 年 2 月 7 日であることを除けば、この事件に関するアルルトの記述は大筋において間違っていない。一方、アルルトによる引用からは、「上海租界」、「英国人」、「英国軍の手による学生虐殺」といった事実が強調されているように思われる。

事実上英国への小麦、牛肉の輸出によって外貨を獲得していたアルゼンチンは、英国資本のアルゼンチンへの進出も盛んであった。1920 年代に至り、米国資本が流入し、アルゼンチンは二国の列強の間でどのような舵を取るべきか選択を迫られていた。当時世界の貿易都市として繁栄を極めていた上海は、ちょうどブエノスアイレスと似た性格を持った世界都市だった。文化的にも映画、レコード、ラジオといった大衆向けの複製文化が隆盛し、上海にもタンゴが流れる時代でもあった。両都市ともに英国の強い経済的支配下にあったことも共通している。

少なくとも、資本と国家が結託し、帝国主義的に世界を席巻しつつあることは、20 世紀の前半にレーニンが述べていることをアルルトは知っていたし[20]、ブエノスアイレスとはちょうど地球の反対側に位置するアジアが、列強の覇権争い、体制の正統性の獲得の争いの場、人間性の解放の闘争の場となっている様を写し取っている。ブエノスアイレスの裏側の上海も、丸い地球でつながっているし、その情報はほぼ同期して伝えられる。そして帝国主義的な体制や抑圧的な体制が人間に対して牙を剥いていることをアルルトは表現している。

4.2. 頁末脚注における国内ニュースの役割

以下の二つの註釈は、世界情勢とは別に、アルゼンチン国内で実際に起こったニュースを挿入した頁末脚注である。以下、二つの内容を分析したい。

4.2.1. クーデターの予見

はじめに検討したいのは「ペテン」と題された章の一節である。占星術師の男の家に、制服を着た軍人、弁護士を名乗るもの、またオカルト集団の中心的な人物たちが集まる。男たちは今後の首都制圧のための策略を練るために集まっている。その中で制服を着た「少佐」を名乗る男が以下のような発言をし、発言の末尾に「作者による註」が添えられている。

「ペテン」

…（中略）…我らの国の富を搾取しようともくろむ企業に権益を与える約束を前提として、大統領選挙は米国資本とともに行われるものであります。わが祖国で行われる政治政党の闘争とは、最高入

札者に国を売ろうとする商売人たちの争い以上の何物でもないと、大げさではなく私は主張するところであります。[1]

1　解説者による註釈：この小説は1928年から1929年の間に書かれ、出版社のロッソにより1929年10月に出版された。そうであるとすると、「少佐」による発言が1930年9月の革命運動でほのめかされたと考えるのは奇妙なことになりはしないだろうか。間違いなく、9月6日の革命家たちの声明は、「少佐」の発言をあまりにも正確になぞり、その後の進展をと軌を一にしている。また、彼の発言の流れは9月6日以降に起こった数多くの出来事を予見している。

（Arlt, 1931?: 125）[21][22][23]

この註釈は1930年に版元がClaridad社に移された第二版か、1931年に出版された第三版で付け加えられている註釈だと言える。この1930年9月6日のクーデターをアルルト自身が予見していたと言明している註釈であるが、「出版社のロッソ」という出版社はアルルトのビブリオグラフィーをあたっても、関係する資料をあたっても出てこない。おそらくこの註釈を虚構内の発言として位置づけ、虚構的発話の中で歴史的事実を述べるという手法を取っている。

この註釈は初版では付け加えられていなかったと考えて間違いない。そうであるということは1931年の『火炎放射器』で採用された、スビエタの分類とは外れる、作品外部のニュースを註釈に取り入れる手法を、のちに導入したと考えたほうが適切であると考えられる。

『七人の狂人』が執筆された1929年代前後は、急進市民連合（UCR: Unión Cívica Radical）から選出されたイポリト・イリゴージェン（Hipólito Yrigoyen）政権の末期にあたる。この時代の状況を俯瞰してみよう。

アルゼンチン歴史家のホセ・ルイス・ロメロ（José Luis Romero）は、この急進市民連合が政権の座にあった1916年から1930年、「急進的共和国の時代」と名付ける。以降、ロメロによる歴史記述をまとめてみたい。急進市民連合は19世紀の末から急速に拡大した都市部の移民を出自にもつ民衆、とりわけブエノスアイレスの中産階級や労働者の広範な支持を獲得し、1916年イポリト・イリゴージェン大統領を政権の座に就けることに成功した[24]。

定住した移民たち、つまり新たな大衆層に支えられた急進市民連合が政権の座についたのは14年間と比較的長い期間であったが、その間、1917年ソヴィエト連邦が成立し、主たる輸出先であった英国経済は停滞し、輸出産業に支えられたアルゼンチン経済は大打撃を受ける。一方で広範な社会主義思想、マルクス主義思想、アナキズムの思想は19世紀の末からヨーロッパとほぼ同期し、ある程度の影響力や組織力を持ち、特にブエノスアイレスでは自由闊達な議論や労働者運動が行われていた。ヨーロッパの前衛芸術なども盛んに輸入され、大衆文化が花開き、文化的にも豊かな時代であった。学生らによる大学改革運動が起こったのもこの頃である[25]。しかし、1920年代半ばからイタリアからムッソリーニによるファシズムの思想が保守派や軍部の青年将校を中心に圧倒的な影響を持って流布しはじめる。

1928年にイリゴージェンが再び大統領の座に就くが、高齢のため政権担当能力を失っており、1929年の世界恐慌のあおりを受け、党内の反イリゴージェン派、軍部、大土地所有者を主とする保守派を後ろ盾とした、ファシズムの信奉者であったホセ・フェリックス・ウリブル（José Félix Uriburu）将軍首班による1930年9月6日クーデターが勃発する（ROMERO, 2013: 127-139）。

現在の歴史家の整理された視点から、ウリブルによるクーデターは必然のように読み取れるが、アルルトが1929年にかけて世相を読み取っていた視点は間違いなくすぐれたジャーナリストと作家としてのそれである。アルルト自らが自分が書いた小説に註釈をくわえるというやや常軌を逸した書き込みにより、この小説は特異な性格を帯びる。

この“Nota del Autor”はさまざまな議論の俎上に

のせられることが多く、同小説の様々な校註版で、“Notas del Autor”に対して、版を担当した研究者による註が付けられている。アルゼンチンの作家リカルド・ピグリア（Ricardo Piglia）は、アルルトの作品が持つ特徴を以下のように指摘している。

> アルルトは、アルゼンチン政治の隠れた核心を捉えた作家で、今日読んだ小説がまるで昨日書かれたように感じられる小説を書いた。それが政治小説だ。それが政治的フィクションだ。政治小説は社会の隠れた核心を捉える。政治小説はいわば、本来の核心であるそれらの要素の形を変え、解釈の核心として機能する。(PIGLIA, 1986: 113-114)[26]

この箇所は『七人の狂人』・『火炎放射器』全体を指して述べられたものだが、引用した頁末脚注部分にも符合する箇所である。1930年9月6日クーデター以降、アルゼンチンは1976年に至るまで7回のクーデターを経験している。ピグリアの発言も、アルルトがその連鎖の起点を予言したテクスト書いたと想定して発言されたものだろう。また、このクーデターの連鎖の始まりを予見した『七人の狂人』・『火炎放射器』が1976年のクーデター以降、アルゼンチンから亡命した30万人以上の人々に含まれる研究者・批評家たちによってアルルトへの言及が盛んになるのもこのテクストのその性質によるものであるに違いない。

上記で引用した「少佐」による秘密結社が成功を導くための発言の要旨は以下のようなものだ。

チリやスペインでの独裁を見るにつけ、アルゼンチンも独裁に最も適した場所だと気づいた。軍内部には不満を抱く将校たちがいる。下院議員の90％がわが軍の中佐より劣っているし、政治能力にも欠ける。軍部の頭脳のほうがよっぽどうまく政治を運営できる。若者や労働者を味方につけるため、革命を起こすには共産主義の要素を付け加えることだ。まずはテロリストたちをばらまき、社会を不安に陥れる。そうして社会不安をあおり、革命への熱狂を巻き起こす。労働者団体は再びストライキを起こし、「革命」や「ボリシェヴィキ主義」という言葉が流通するようになる。街で多くの爆弾が炸裂する一方で、革命に関する声明が読まれるようになれば、革命への熱狂が巻き起こる。そこで軍部は、「移行期」を宣言しながら独裁政権の座を獲得する。そうすればブルジョア資本や保守的な外国政府はその状態に慣れる。独裁政権はソヴィエト連邦に従う必要はないし、爆弾を仕掛けるような連中は銃殺すればいい。両議院もなくなって、国家予算も最小限に抑えられるだろう。そうすれば今までにない国家の繁栄が築ける（Arlt, 2000: 159-160）。したがって、「少佐」は国家転覆を目論む占星術師の秘密結社に加わるという論理だ。

ウリブル首班による1930年9月6日クーデターから1943年は後の歴史学者によってDécada Ínfame「汚辱の時代」と呼ばれることとなる。ファシズムを奉じていたウリブルは、1931年11月8日に、不正選挙の結果、大統領の座をフスト将軍に譲る。フストはファシストではなく、むしろ現実主義者であった。1932年オタワ会議によって大英帝国のブロック経済化が進むのを見るや、1933年、英国との経済関係に多くを依存していたアルゼンチン経済の危機を見出しアルゼンチンと英国の経済的互恵関係を確認したロカ・ランシマン協定を結ぶ（ROMERO, 2013: 140-142）。

したがって、上で引用された「少佐」の発言が現実と交差したのはごくわずかな期間だったと言えるだろう。しかし、ウリブル独裁の最中にも社会運動に過激な弾圧はくわえられたし、独裁が終わった後、表向きには不正選挙の結果であれ共和制を保っていたアルゼンチン内部にも、保守派、軍部、あるいは若者たちを通じてファシズム、ドイツのナチス政権に感化される層が現れた。先にも述べたとおり大土地所有者の利害と国粋主義が結びついたり、あるいはポピュリズム的なコーポラティズム的国粋主義が様々な陰謀と結びつき「愛国的」クーデターが幾度となく引き起こされることになる。この頁末脚注はその意味で、アルゼンチンのその後の政治とその核心をついた箇所である。

4.2.2 アナキスト、ディ・ジョヴァンニの復活

エルドサインと占星術師の二人は、秘密結社の組織運営資金を得るため、贋金づくりを依頼しに、ドック・スールという港町にある貧民街にあるあばら家へと赴く。

> 占星術師はドアを叩くことなく家に入っていった。部屋では電灯の下で二人の男がトランプをしていた。一人は痩せぎすで、青白い肌をしており、頬骨は高く、髪はちぢれ、黒い瞳をしていた。もう一人は太っており、てかてか光ったヒゲをはやし、瞳は青く、金髪で、青い作業着を着ていた。（Arlt, 2000: 446）[27]

この家の描写が続いた後、註釈が付け加えられる。

> 1　註釈者による註：エルドサインは後になって、当初の目的がなんなのかわからなかった、彼らへの訪問について語った。彼は私に、あの緑色の目をした男が、アナキストのデ・ジョヴァンニだったかもしれないと頭をよぎった。とはいえ、口を謹んでアストロロゴには何の質問もしなかったのだけれども、と言った。（Arlt, 2000: 447）[28]

このディ・ジョヴァンニという人物は実在したイタリア生まれのアナキストである。以下に述べるが、ディ・ジョヴァンニはウリブル政権により銃殺刑で命を落とす。

アルルトは当時専属のクロニスタとして雇われていた日刊紙 *El Mundo* の特派員としてディ・ジョヴァンニの銃殺刑に立ち会い、記事にしている。ディ・ジョヴァンニの処刑の次の日、1931 年 2 月 2 日に *El Mundo* 紙上に掲載された“He visto morir”「私は死を目撃した」と題されたクロニカである。

ディ・ジョヴァンニがどのような文脈で生きた人物であったのかを簡潔に述べた文書が見つかったため、少々長くなるが引用し、検討したい。

「1930 年アルゼンチン地域労働者連合（Federación Obrera Regional Argentina: FORA）には 10 万人を超える加盟者がいた。その数は同国の自覚した戦闘的なプロレタリアートの圧倒的な大多数を示している。その成長は、サンティジャン氏の意見によれば、1930 年 9 月 6 日に始まったウリブル将軍によるクーデターの大義の一つがアルゼンチンのファシスト政権のものだったことによる。保守主義者、「独立社会主義者」と呼ばれるもの、ファシストグループ、ペロン大尉のようなムッソリーニを信奉する多くの将校たちの支持を得たこの「革命」は土地所有者、商人、銀行家たちを熱狂の渦に巻き込み、その上すぐさま労働者運動へ組織的な弾圧を加え始めた。新聞やアナキスト組合の閉鎖は言うまでもなく、最も活動的な左派の闘士を追放したり投獄したりした。彼らの多くはまた殺害されもした。（...中略...）。ウリブル独裁政権下で射殺されたものの中で最も有名なのはセベリーノ・ディ・ジョヴァンニである。彼は反組織的で暴力的なアナキズムを信奉していたイタリア人扇動者だった。イタリアでムッソリーニが政権に就いた直後、1923 年ブエノスアイレスにやってきて、アナキスト系の新聞社ラ・プロテスタのグループと衝突をしていた。ラ・プロテスタのグループは闘争の通常形態として武装暴力には反対しており、なによりもプロパガンダ戦術と組合活動を信頼していた。1929 年ディ・ジョヴァンニはラ・プロテスタの編集長であるエミリオ・ロペス＝アランゴ殺害の犯人だとみなされていた。確かなことは、ディ・ジョヴァンニは徴発の理念に基づき、いくつかの銀行を襲撃していたということだ。その襲撃によって何人かの死者も出ていた。ウリブル政権は彼に戒厳令を適用し、国立刑務所でパウリーノ・スカルフォとともに銃殺刑に処した。」（CAPPELLETTI, 1990, XXIX-XXX）[29]

ディ・ジョヴァンニのアナキストとしては過激派だったとはいえ、ウリブル政権による彼の銃殺刑は、当時ブエノスアイレスで 19 世紀の末から盛んであったアナキストたちやその他の労働運動にショックを

与えたことは想像に難くない。実際、移民たちを中心に組織されていたアルゼンチンでのアナキストの活動は、1930年代を境にかつて持っていた力を失う（NOBLE, 2006: 112）。この要素は小説内で「少佐」が語っていた暴力的な事件を引き起こさせ、独裁政権の地盤を強固にするという謀略と符合する。ファシストによる見せしめとしての銃殺刑で、ディ・ジョヴァンニは殺されたと考えることもできる。しかし、独裁体制による見せしめの被害者としてのみディ・ジョヴァンニは註釈の中で引用されたわけではない。

『七人の狂人』および『火炎放射器』のエピローグの直前の結末部分で、苦悩や葛藤が小説の中で存分に描かれた主人公のエルドサインは、恋人を殺した後に自殺する。その部分で、エルドサインの一生はたった二行の新聞見出しでまとめられる。

> 9時45分、鉄道車両の中で
> 凶暴な殺人鬼エルドサイン、自殺する
> （Arlt, 2000: 594）[30]

ジャーナリストとしてのアルルトは、*Crítica* 紙に在籍していた頃、犯罪記事を担当していた。従って、日々のルーティーン・ワークとして、事件を短くかつセンセーショナルに伝える手法を身につけていた。そしてアルルトは、ディ・ジョヴァンニという一人のアナキストが独裁政権によって銃殺される様を、*El Mundo* 紙の新聞特派員として取材し、記事にし、掲載した。簡潔性・センセーショナル性・暴力性を旨とするイエロー・ジャーナリズムや大衆新聞自体が持つ暴力性を存分に知っていたアルルトは、註釈の中で再びディ・ジョヴァンニが生きている姿をブエノスアイレスの場末の港湾地帯に蘇らせたと読み解くことができる。

ディ・ジョヴァンニは爆弾テロを引き起こした暴力的アナキストとして悪党扱いもされるが、彼のアナキズムに対する純粋な信仰と義賊的行動から、現在でもアルゼンチンのアンチ・ヒーローとして評価する動きも存在する（NOBLE, 2006）。毒ガステロにより首都制圧の陰謀を企てた秘密結社の物語は、近代世界システムの中に組み込まれた周縁的国家という体制からの解放を夢見る物語だという読み方もできる。アルルトはフィクションでそれを語り、ディ・ジョヴァンニは現実に実現しようとした。アルルトは、贋金づくりを通じて独占的な資本主義社会にほころびを生じさせる集団の描写の中にディ・ジョヴァンニの影をちらつかせることで、抑圧的な体制からの絶対の解放を望んだディ・ジョヴァンニへのオマージュを捧げたのだ。

5. 終わりに―社会の歪んだ鏡としての小説・対照される現実

作家のリカルド・ピグリアはアルルトについて以下のように述べている。ホセ・マルモル（José Mármol: 1817-1871）による『アマリア』*Amalia*（1851）の例を挙げ、政治と小説の特異な関係を持つアルゼンチン文学の一つの伝統について語り、アルルトをその後継者だと述べる。

> アルルトの小説が面白いのは、社会の解釈のカギを「陰謀」にしているところだ。アルルトは偽造と倒錯した政治を通じてその仕事を完璧にした作家だ。しかし、私はそこにアルゼンチン文学の偉大な伝統を見出す。多くの作家たちは現在から未来の現実の基本的な道筋を感じ取っていた。総じて物事が凝縮されて現れている時代にそのような現象がおこる。社会の核心を知覚するのはたった一人の主体ではない。そうではなく隠された強烈な緊張感が存在するのだ。その隠された強烈な緊張感は目に見える形になって、社会的な想像力の吹き出す点がはっきりと表れる[31]。

ピグリアの言う「陰謀」とは、秘密結社が組織され、不可解なイデオロギーを中心に人々を熱狂の渦に巻き込み、操作しようとする、当時はファシズムやナチズム、今日では宗教的原理主義や排外主義などがそれにあたる。以上の引用でピグリアは、アルルトが創作し

た秘密結社の物語は、当時の不穏な社会状況に物語の形を与えたフィクションであるという指摘している。また、上記で引用したように、アルゼンチン政治がクーデターを何度も繰り返す社会構造の核心を取り出した作品であるとも述べている。

ピグリアは別の箇所で「アルルトは当時の政治や事件や出来事に一つも言及することなく社会の隠れた核心を捉えた物語を創作した。」（PIGLIA, 1986: 114）と述べているが、その点には本稿の主張から反論を唱えたい。アルルトは、小説の様々な場面で、頁末脚注の手法を使いながら、当時起こっていた社会的な事件を挿入することで、秘密結社の物語との同時性を示していた。こう言ってよければ、秘密結社の物語は当時の社会からのカタルシスを求める寓話であり、その寓話が現実と歪んだ鏡のような関係にあることを、四つの頁末脚注からほのめかしていた。

一つは日中戦争開戦直後の、中国の上海租界地域における植民地主義への抵抗であり、それに対する抑圧の挿話。ブエノスアイレスからは地球の裏側で起こる帝国主義的暴力への漠然とした敵意を示している。

二つ目は、アメリカのシカゴではびこる、当時イエロー・ジャーナリズムの格好の対象となっていたギャング抗争。ギャング組織を秘密結社とみなし、その抗争を挿入することで、表の政治が機能しない裏社会にはびこる暴力を描写し、占星術師たちの秘密結社もその暴力とは無縁ではないことを提示した。

三つ目は、小説内で予見されていた、1930年9月6日クーデターへの言及である。小説の登場人物の言及が、後に起こったクーデターの筋をなぞっていたことを指摘し、占星術師たちの抱く陰謀が当時のアルゼンチンにもはびこっていたことを提示した。

四つ目はアルルトが銃殺刑の様子をクロニカにしたディ・ジョヴァンニへの言及である。アンダーグラウンドなブエノスアイレスの世界を再現し、一義的にはファシスト政権であったウリブルの弾圧を批判するために引用していると考えられる。

本稿で扱った四つの頁末脚注の戦略は、初めに言及した鬼塚論文による、ボルヘスのテクストをテクストの内部で重層化し、読者に目くらましを食らわせるという、テクストの内部に閉じた戦略とは真逆である。アルルトの四つの註釈はテクストを作品内部に閉じ込めるのではなく、テクストの外部の世界を参照させることで、作品を現実の世界に対して開く機能を持っている。したがってスビエタによる“Nota al pie”の解説には4つめの機能が加えられなければならない。「テクスト外で起こった事件やニュースへの言及」である。

最後にアルルトが目指した文学を示したマニフェストともとれる『火炎放射器』の序文を引用してみたい。

アルルトは『七人の狂人』出版以後、文壇関係者から散々罵詈雑言を受けたという。それに対してアルルトは力強く宣言する。

> 未来は私たちのものだ。私たちの作品の絶対的な力をもって。われわれの文学を作ろう。文学についてあれこれ話し続けるのではなく、誇り高く、孤独の中、書きながら文学を作るのだ。顎へぶちこむクロスカウンターのような暴力をはらんだ本を。そうだ、次から次へ本を書くのだ。「よい子ちゃんがしかめっつら」をするような本を。
>
> （Arlt, 2000: 286）[32]

「顎へぶちこむクロスカウンター」とは、文壇や中産階級読者が安住しているヨーロッパ前衛と結びついた「芸術のための芸術」に対する攻撃のことを指しているのだろう。そのため、アルルトの『七人の狂人』・『火炎放射器』は、「芸術のための芸術」でもなく社会主義リアリズムとは異なったその特異な手法で描かれた。秘密結社の陰謀は近現代アルゼンチン政治を貫く陰謀の寓話であるとも、社会からの抑圧から解放されるためのカタルシスを求める物語とも読み取れる。いわば現実の歪んだ鏡である。そのテクストを外部に対して開き、現実と突き合わせる参照点を示すため、アルルトは現実に起こっている四つ「ニュースの挿入」の頁末脚注の戦略を取ったのだ。

今回は秘密結社の箇所に付け加えられた註釈のみに焦点を当てたが、註釈の特異性を分析することで作品

のテーマの一つである秘密結社の物語が持つ怪奇性、複雑性が明らかになってきた。秘密結社のイデオロギー性についてはさらに詳しい分析を加える必要がある。

対象テクスト

Roberto Arlt, *Las ciencias ocultas en la ciudad de Buenos Aires,* en *Obras,Tomo I*, Buenos Aires: Editorial Planeta, 1991, 527-553

Roberto Arlt, *Los siete locos*, Buenos Aires: Claridad, 1931?

Roberto Arlt, *Los siete locos, Los lanzallamas*, Barcelona: Galaxia Gutenberg, Círculo de Lectores, 2000, edición crítica, Mario Goloboff, coordinador,

引用文献

GARCÍA FANLO, *Emergencia de la matriz militar discursiva argentina: el discurso de Leopoldo Lugones, en Discurso y argentinidad,* (Vol. 1, No. 1), 2007, http://www.aacademica.com/luis.garcia.fanlo/33.pdf（2015 年 8 月 25 日取得）

GNUTZMANN, Rita, *Roberto Arlt o el arte de calidoscopio*, Murcia: Universidad del País Vasco, 1984

PIGLIA, Ricardo, *Crítica y ficción*, Barcelona: Editorial Anagrama, 1986

NOBLE, Cristina, *Severino Di Giovanni: La pasión anarquista*, Buenos Aires: Capital Intelectual, 2006

RAMA, Carlos M. y CAPPELLETTI, Angel J. (Selección y notas), CAPPELLETTI, Angel J. (Prólogo y cronología), *El anarquismo en América Latina*, Caracas: Biblioteca Ayacucho, 1990

ROMERO, José Luis, *Breve historia de la Argentina*, Nueva edición aumentada y actualizada 2013, Buenos Aires: Fondo de Cultura Económica, 2013

SAÍTTA, Sylvia, *El escritor en el bosque de ladrillos: Una biografía de Roberto Arlt*, Buenos Aires: Editorial Sudamericana, 2000

SARLO, Beatriz. *Una modernidad periférica: Buenos Aires 1920 y 1930*, Buenos Aires: Nueva Visión, 1988

SORDI, Fabiana A., (Selección, estudio y nota), *Florida y Boedo: Antología de vanguardistas argentinas*, Buenos Aires: Santillana, 1998

ZUBIETA, Ana María, *Nota*, en Roberto Arlt, *Los siete locos, Los lanzallamas*, edición crítica, Mario Goloboff, coordinador, Barcelona: Galaxia Gutenberg, Círculo de Lectores,2000,

大田俊寛、『現代オカルトの根源―霊性進化論の光と闇』、筑摩書房、2013

鬼塚哲郎、「注のついたフィクション―ボルヘスのテキストにおける頁末脚注のナラトロジー的分析」、『ラテンアメリカ研究年報』（No.19）、1999、151-170

辛島驍、『中国現代文学の研究』、1983、汲古書院、363

ケリー，ロバート・J 著、藤本哲也監訳、『アメリカ合衆国における組織犯罪百科事典―カポネ時代のシカゴから新たな暗黒街時代まで』、中央大学出版部、2010

ジュネット，ジュラール著、花輪光・和泉涼一訳、『物語のディスクール―方法論の試み』、水声社、1985

高際裕哉、「ロベルト・アルルトの三つの短編にみる『とある近代性』」、『東京外国語大学大学院博士後期課程論叢　言語・地域文化研究』（第 20 号）、2014、69-85

注

1 短編全集は
Roberto Arlt, *Cuentos completos*, Buenos Aires: Seix Barral, 1996 (edición a cargo de Ricardo Piglia y Omar Borré)
Roberto Arlt, *Cuentos completos:*, Buenos Aires: Editorial Losada, 1998 (prefacio de Gustavo Martí Garzo, posfacio de David Viñas) の 2 ヴァージョンがあり、点数の数え方に微妙な差がある。点数の多い後者の Editorial Losada 版の点数を掲載した。

2 移民労働者階級のプロレタリア文学を代表するのがボエド派、ヨーロッパ前衛を輸入しそれに近い文学活動を行っていたのがフロリダ派としてしばしば分類されるがその分類は現在のところあまり支持されていないようだ。確かにボエド派を自認する作家は二人存在した。エリアス・カステルヌオボ（Elías Castelnuovo）とレオニダス・バルレッタ（Leónidas Barletta）だ。フロリダ派というのは、文化資本を持ち、ヨーロッパ前衛と交流を持ち彼らを参照しつつも新たな文学表現を求めていた作家たちのことを指していると考えて間違いないだろう。（SORDI, 1998: 19-20）
　よくある紋切型として、ボエド派の代表がアルルトでフロリダ派の代表がボルヘスであるという分類なされるが、両者のスタイルが対照的であっただけで、両者が文学派閥を代表しているわけではない。アルルトは処女作発表の直前に、ボルヘスも編集委員を務めていた「フロリダ派」の雑誌 *Proa* に *El juguete rabioso* の抜粋部分を掲載している。

3 主たる論考としては以下。
AMÍCOLA, José, *Fritz Lang, Alfred Döblin y Roberto Arlt* en Wolfram Nitsch/Matei Chihaia/Alejandra Torres (eds.), *Ficciones de los medios en la periferia. Técnicas de comunicación en la literatura hispanoamericana moderna*, Köln, Universitäts- und Stadtbibliothek Köln, 2008 (Kölner elektronische Schriftenreihe,1), pp. 161–169.
AIRA, César, *Arlt* en Paradoxa, (No.7), Rosario: Beatriz Viterbo, 1993
CAPDEVILA, Analía, *Arlt: La ciudad expresionista,* en *Boletín del Centro de Estudios de Teoría y Crítica Literaria*, (No. 7), Rosario: Universidad Nacional de Rosario, 130–141
SARLO, Beatriz, *Arlt: ciudad real, ciudad imaginaria, ciudad reformada*, en *Punto de Vista*, (No.42, abril), Buenos Aires, 1992,
KOMI, Christina. *Recorridos urbanos: La Buenos Aires de Roberto Arlt y Juan Carlos Onetti*, Madrid: Iberoamericana, 2009
LEINDIVIT, Zenda. *Vida de Monstruos: Espacio, violencia y ficción en la obra de Roberto Arlt*, Buenos Aires: Contratiempo Ediciones, 2010

4 ファシズムと秘密結社のイデオロギーの関係について述べた代表的な著作は以下。
AMÍCOLA, José, *Astrología y fascismo en la obra de Arlt*, Buenos Aires: Weimar Ediciones, 1981

5 筆者註：原文ママ

6 Quizá exista también una matemática del espíritu cuyas terribles leyes son tan inviolables como las que rigen las combinaciones y de los números y de las líneas (1).
(1)Nota del comentador: Este capítulo de las confesiones de Erdosain me hizo pensar más tarde si la idea del crimen a cometer no existiría en él una forma subconciente, lo que explicaría su pasividad frente a la agresión de Barsut. (Arlt, 2000: 80)

7 c. Es la primera nota del comentador o cronista de la historia, figura fundamental del relato, porque constituye una vía de acceso a la verdad a la cual puede llegar por tres procedimientos distintos: 1. por *interpretación, corrección o suposición*; 2. por la *consulta* a otros voces; 3. por la *reproducción* de las palabras de Erdosain que permiten reflexionar sobre lo hecho o dicho. Esta nota pertenece a la primera categoría. (ZUBIETA, 2000: 80)

8 a. La presencia de la noticia leída por algunos de los personajes es constante en las obras de Roberto Arlt (en *El juguete rabioso*, su primera novela, pubulicada en 1926, ya se daba esa situación.) (ZUBIETA, 2000: 354)

9 Demos fin: he visto en manos de niñas de 8 a 15 años de edad, cuyos padres imprudentes las conducían a la logia, libros de la índole ya citada, cuyo efecto en esas tiernas mentes infantiles tan propensas a la sugestión, no se hará esperar. (...)
Es doloroso y la realidad lo será aún más, si la colectividad no trata de poner un freno o una ley a estas agrupaciones, donde germina una futura y delicada degeneración. (37)

(37) Es de aplaudir la actitud de la policía, que no ha mucho clausuró una Escuela de Magia situada en la calle Callao y Corrientes. (Arlt, 1991: 550)

10 Annie Bessant と記述されているが、彼女の名前は Annie Besant が正しいようである。

11 “En Bénares tuve ocasión de conocer a la eminente teosofista Annie Bessant, joven inglesa patriota, que ante y sobre todo, trata de formar en los jóvenes Hindúes sentimientos de adhesión y lealtad hacia el gobierno inglés; esa es su misión” (38)

(38) Véase *La raza roja*, página 4(Arlt, 1991: 550)

12 Más adelante en la misma obra, entrando a juzgar próximos acontecimientos sociales que a nuestro entender domina imperfectamente, la señora Bessant oscilando entre las hipótesis sociológicas de Novicow y Bakounine, plantea con mucha seguridad una futura Federación de Estados, bajo la hegemonía Inglaterra. (Arlt, 1991: 551)

13 ―¿De manera que una de las bases de su sociedad será la obediencia?

―Y industrialismo. Hace falta oro para atraparla conciencia de los hombres. Así como hubo el misticismo religioso y el caballeresco, hay que crear el misticismo industiral. (...) Mi político, mi alumno político en la sociedad será un hombre que pretenderá conquistar la felicidad mediante la industria. Este revolucionario sabrá hablar tan bien de un tejido de estampado como de la desmagnetización de un acero.(Arlt, 2000: 43)

14 Son cuatro. Yo estaré encargado de todo, ―continuó el Astrólogo―. Vd., Erdosain, Jefe de Industrias; el Buscador de oro ―un joven que estaba en el ángulo de la mesa inclinó la cabeza― tendrá cargo las Colonias y Minas; el Mayor ramificará nuestra sociedad en el ejéricito, y Haffner será el Jefe de los Prostíbulos. (Arlt, 2000: 159)

15 Lo que usted dice no tiene sentido. La sociedad actual se basa en la explotación del hombre, de la mujer y del niño. Vaya, si quiere tener conciencia de lo que es la explotación capitalista, a las fundiciones de hierro de Avellaneda, a los frigoríficos y a las fábricas de vidrio, manufactura de fósforos y de tabaco. ―Reía desgradablemente al decir estas cosas―. Nosotros, los hombres de ambiente, tenemos a una o dos mujeres; ellos, los industriales, a una multitud de seres humanos. ¿Cómo hay que llamarles a esos hombres? ¿ Y quién es más desalmado, el dueño de un prostíbulo, o la sociedad de accionistas de una empresa? Y sin ir más lejos, ¿no le exigían a usted que fuera honrado con un sueldo de cien pesos y llevando diez mil en la cartera? (Arlt, 200: 50)

16 ―Venía un telegrama muy interesante de la United Press. Las bandas de Al Capone y George Moran, alias el Chinche, se han aliado para explotar el vicio.(1) Lo cual significa que en Chicago quedarán suprimidos por algún tiempo los combates con fusiles ametralladoras entre los rufians de ambas pandillas.

1 *Nota del autor*: La alianza entre Al Capone y George Moran, rigurosamente histórica, fue breve. Poco tiempo después de los acontecimientos que dejamos narrados Al Capone hizo disfrazar de “policemen” a varios de sus cómplices. Estos, en la mañana del 16 de noviembre de 1929, detuvieron a cinco ayudantes de Moran en en la calle Clark al 2100, los hermanos Frank y Pete Gusenberg, John May, Albert Weinshank y el doctor Schwimmer, también bandido. Estos sujetos fueron alineados contra un muro, en el fondo del garaje de la Cartage Company, y ejecutados con fusiles ametralladoras. (Arlt, 2000: 354)

17 Las agencias telegráficas hacen correr la noticia por toda la redondez del planeta. Estamos en el siglo veinte, amigo, y a estas horas todos los imbéciles honestos que decoran el planeta se han enterado de la alianza de dos eximios bandidos. (Arlt, 2000: 354)

18 ―¡Irse! ¡Con qué facilidad lo decís vos! ¿Irse adónde?Cuando era chico pensaba en las tierras extrañas donde los hombres tienen color de la tierra y llevan collares de dientes de caiman. Esas tierras ya no existen. Todas las costas del mundo están ocupados por hombres feroces que con auxilio de cañones y ametralladoras instalan factorías y queman vivos a pobres indígenas que se resisiten a sus latrocinios. ¡Irse! ¿Sabés lo que hay que hacer para irse?... Matarse.(1) (Arlt, 2000: 492)

19 1. *Nota del comentador*. Erdosain tenía razón al afirmar semejantes monstruosidades. A la hora de cerrarse la edición de este libro los diarios franceses traían estas noticias de China: Si Wei Sen, escritor comunista, secretario del “Shangai Times”, fue detenido por los ingleses el 17 de enero de 1931, y entregado al gobierno de Nankin, quien lo quemó vivo en compañía de cinco camaradas. Era autor de una Vida de Dostoievski. Fen Keng, escritor detenido por los ingleses en la concesión internacional, entregado por éstos al Kuomitang, fusilado en la noche del 17 de febrero. Autor de una novela titulada “Resurrección”. Se había convertido al comunismo desde que el 30 de mayo asistió a una masacre de estudiantes efectuada por soldados ingleses. You Shih. Escritor. Detenido por los ingleses, entregado

al Kuomitang, y ejectado en la noche del 17 de febrero. (Arlt, 2000: 492)

20 秘密結社のリーダー、占星術師の本名が Alberto Lezin であることが物語の結末で提示される。

21 以上の註釈は 2013 年 8 月に、大英図書館にて Roberto Arlt, *Los siete locos*, Buenos Aires: Claridad, 1929 と目録に書かれていた書物のコピーを筆者が転写したものである。確かに、Claridad 社の出版物ではあることは確認できたのだが、書物に出版年が見当たらなかった。確認できるとすれば、小説の終わりに付けられた“15 de septiembre de 1929. ―Buenos Aires”という日付である。おそらく、アルルトが脱稿した日付であるかもしれない。しかし、アルルト研究のどの書誌情報をあたっても、1929 年に発表された版は Editorial Latina 社のものしか見当たらない。Claridad 社から出版されたと言われているのは 1930 年の版と 1931 年の版の二つのヴァージョンである。国外であることを考慮に入れると、大英図書館目録の書誌情報が誤っていると考えられる。

2014 年 3 月、ブエノスアイレスにて 2000 年の時点でアルルトが公開したテクストをまとめているシルビア・サイッタ（Sylvia Saítta）にインタヴューをしたところ、Claridad 社の版は出版年を明記しておらず、出版年の裏付けをとるのが困難であるとの確認が取れた。サイッタ氏の整理によれば生前出版された版は以下の通り。

Año 1929

Los siete locos, Buenos Aires, Latina, octubre de 1929. (Novela)

Año 1930

Los siete locos, Buenos Aires, Claridad, 1930 (Novela. Segunda edición)

Año 1931

Los siete locos, Buenos Aires, Claridad, 1931 (Novela. Tercera edición) (SAÍTTA, 2000: 225-323)

22 (...)Las elecciones presidenciales se hacen con capitales norteamericanos, previa promesa de otrgar concesiones a una empresa interesada en explorar en nuestras riquezas nacionales. No exagero, cuando digo que la lucha de los partidos políticos en nuestra patria, no es nada más que una riña entre comerciantes que quieren vender el país al mejor postor. (1)

(1) *Nota del Autor*: Esta novela fué escrita en los años 28 y 29 y editada por la editorial Rosso, en el mes de octubre de 1929. Sería irrisorio entonces creer que las manifestaciones del Mayor han sido sugeridas por el movimiento revolucionario del 6 de Septiembre de 1930. Indudablemente, resulta curioso que las declaraciones de los revolucionarios del 6 de setiembre coincidan con tanta exactitud con aquéllas que hace el Mayor y cuyo desarrollo confirman numerosos sucesos acaecidos después de 6 de Septiembre. (Arlt, 1931?: 125)

23 ウリブルがクーデターで政権を取った際、発表された声明は、アルゼンチンの文人レオポルド・ルゴーネス（Leopoldo Lugones: 1874-1938）によって起草されたと言われている。本稿では声明の内容を資料として見つけられなかったため扱えなかったが、その声明の草稿を分析した論文が存在する（GARCÍA FANLO, 2007）。この分析に関しては稿を改めることとする。

24 イリゴージェン政権の第一期は 1916 年から 1922 年まで続く。石油産業の国有化、鉄道の国有化では成果を挙げたものの、小麦や牛肉を主とした輸出産業に支えられた国内の経済構造は変えられず、支持層であった中産階級および労働者階級向けの政策では大胆な成果が挙げられなかった。1919 年 1 月に起こったゼネラル・ストライキは、御用組合の力も借り、暴力的に鎮圧することさえあった。しかし、都市部の住民の漠然とした支持から政権運営は比較的安定していた。

イリゴージェンの政権を引き継いだマルセロ・トルクアト・デ・アルベアール（Marcelo Torcuato de Alvear）政権は 1922 年から 1928 年まで続く。保守的な傾向にあった同政権は、第一次世界大戦以降、劣悪な条件下にあったアルゼンチン経済を比較的穏健に運営し政治的には安定していたが、第一次世界大戦にその頂点を迎え、下降線をたどるアルゼンチン経済が世界経済の不況の波に巻き込まれることは避けられなかった。（ROMERO, 2013: 127-139）

25 このころのアルゼンチンのメディア編成の変化とそれに伴う大衆文化の勃興は以下の書物に詳しく書かれている。

SARLO, Beatriz. *Una modernidad periférica: Buenos Aires 1920 y 1930*, Buenos Aires: Nueva Visión,1988

MANGONE, Carlos. “La república radical: Entre *Crítica y El Mundo*”. MONTALDO, Graciela (comp.). *Yrigoyen entre Borges y Arlt* (1916-1930). VIÑAS, David (dir.). Buenos Aires: Editorial Contrapunto, 1989, 73-107.

26 Arlt fue el que captó el núcleo secreto de la política argentina, y escribió una novela que se lee hoy y parece que se

escribió ayer. Eso es la literatura política. Eso es la ficción política. Capta núculeo secreto de la sociedad. Funsiona, digamos así, transformando esos elementos que son los núcleos verdaderos, los núcleos de interpretación. (PIGLIA, 1986: 113-114)

27 El Astrólogo, sin llamar, entró. Bajo la galería, a la luz de una lámpara eléctrica, dos hombres jugaban a los naipes. Uno era delgado, pálido, pomuloso, de pelo crespo y ojos negros. El otro grueso, de barbilla reluciente, ojos verdosos, cabello rubio, vestía de traje azul de mecánico. (Arlt, 2000: 446)

28 1 *Nota del comentador*: Refiriéndose Erdosain más tarde a esta visita, cuyo objeto no comprendió en los primeros momentos, me manifestó que pensando luego en el hombre de los ojos verdosos se le ocurrió que podía ser el anarquista De Giovanni, mas prudentemente se abstuvo de hacerle ninguna pregunta al Astrólgo. (Arlt, 2000: 447)

29 En 1930 contaba la FORA con más de cien mil afiliados, lo cual representaba una clara mayoría en el proletariado consciente y militante del país. Su crecimiento fue, según opina Santillán "una de las causas del golpe de estado del general Uriburu, que inauguró el 6 de septiembre de 1930 la era de los gobiernos fascistas en la Argentina". Esta "revolución", que contó con el apoyo de los conservadores, de los llamados "socialistas independientes", de los grupos fascistas y de muchos oficiales admiradores de Mussolini como el capitán Perón, llenó de euforia a terratenientes, comerciantes y banqueros, e inició inmediatamente una sistemática persecución contra el movimiento obrero. No se limitó a clausurar periódicos y sindicatos anarquistas, a desterrar o encarcelar a los más activos militantes de la izquierda: asesinó también a muchos de ellos, (...) . El más celebre de los fusilados por la dictadura Uriburu fue Severino Di Giovanni, agitador italiano que profesaba un anarquismo antiorganizativo y violento. Llegado a Buenos Aires en 1923, poco después del ascenso de Mussolini al poder en Italia, se había enfrentado con el grupo de *La Protesta*, que adversaba la violencia armada como método oridinario de lucha y confiaba, sobre todo, en la propaganda y la acción sindical. En 1929 se atribuyó a Di Giovanni el asesinato de Emilio López Arango, director de protesta. Lo cierto es que, fundado en la idea de la expropiación, asaltó algunos bancos, no sin dejar en esas acciones también algunos muertos. El gobierno de Uriburu le aplicó la ley marcial y lo fusiló en la Penitenciaria Nacional, junto a Paulino Scarfó. (CAPPELLETTI, 1990, XXIX-XXX）

30 *En el tren de las nueve y cuarenta y cinco se suicidó el feroz asesino Erdosain* (Arlt, 2000: 594)

31 "Lo interesante es que las novelas han hecho del complot la clave de interpretación de la sociedad. Arlt es el que lleva a la perfección ese trabajo con la falsificación y la política perversa, pero yo veo ahí gran tradición de la literatura argentina. Muchos escritores han sido capaces de percibir en el presente las líneas básicas de la realidad futura. Eso ha sucedido en general en momentos de gran condensación, cuando no es sólo un sujeto el que percibe los núculeos de una sociedad, sino que hay grandes tensiones secretas que se hacen visibles y aparecen con nitidez los puntos de fuga del imaginario social." (PIGLIA, 1986: 38-39)

32 "El futuro es nuestro, por prepotencia de trabajo. Creamos nuestra literatura, no conservando contiuamente de literatura, sino escribiendo en orugullosa soledad libros que encierren la violencia de un "cross" a la mandíbula. Sí, un libro tras otro, y "que los enucos bufen"." (Arlt, 2000: 286)